OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

談　話　室

チェーホフの「講義」論－FDに関連して－

村　瀬　裕　也

この春，ペレストロイカで意気軒昂たるモスクワ芸術座の『伯父ワーニャ』（エフレーモフ演出）を観て以来，久しく眠っていたチェーホフへの関心が頓に目覚め，しばしば暇を盗んではその作品を繙いている。もっとも彼の戯曲の上演を観劇する機会はこれまで度々あったから，チェーホフといれば何となく身近な作家のひとりと思いこんでいたのだが，その小説類を読みかえすのは，気がついてみると実に30数年ぶりのことである。

すべての古典がそうであるように，彼の作品もまた，読者の人生経験に応じて様々の相貌を呈し，その都度新鮮な興味と共感を喚起する。ここに取り上げるチェーホフ屈指の中編『退屈な話』もまた決して例外ではない。死期の迫った老学者の何の変哲もない日常に漂う寂寞と暗愁，――それは十代の頃の私にも理解できないではなかった。否むしろ，あの頃，この作品を通し，未知の人生の深淵に触れて惹起された感傷的情感は，今となってはもはや取り戻すすべもないものであろう。だがその反面，日常の断面に対するチェーホフのいかにもリアリストらしい観察が，当時の私にどれほどの興味を以て受け止められたかは，頗る怪しいものである。

例えば，試験に落第して「及第点」をねだりに主人公の私宅まで襲ってくる学生が登場する。その件りを引用してみよう。「『先生，お願いですから，どうか〔及第点〕をつけてくださいませんか，といいますのは…』おおかたの怠け者が，自分に都合がいいようにこねまわす理屈は，いつも判で捺したようにきまっている――彼らは，ほかの科目はみんなりっぱりパスしたのに，わたしの科目だけに失敗した。しかも，彼らは日ごろ，それを熱心に勉強して，よくわかっていたというのだから，ますます驚くべきである。彼らが失敗したのは，一種不可解な思い違いのせいなのだ。」――わが香川大学でも，試験の結果が公表された後，同じ経験をする教員は少なくないであろう。しかも主人公がこの学生に垂れる訓示は，私が似たような状況で学生に垂れる訓示と，これも判で捺したように類似しているのだ。

また例えば，いわゆる「専門主義」に対する辛辣な風刺も見られる。槍玉にあげられるのは主人公の解剖助手である。彼はおとなしい勉強家であり，いつも働いており，多くの本を読み，読んだものはよく記憶している。だがそのやり方はいかにも馬車馬的であり，いわば「学問の鈍物」である。チェーホフは主人公の口を借り，「天才からこの男を区別している特徴」として，次の二点を挙げる。第一は，絶対に専門に限られた眼界の狭隘さ。第二は，科学

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

の絶対性，主としてドイツ人の著作――これは今日の日本では別のものに置き換えて想像すればよい――の絶対性に対する狂信的信仰，つまりは「権威に対する奴隷的崇拝と，独自の思想にたいする要求の欠如」。このような鈍物である自分の弟子について，主人公は言う，「彼の未来はわたしにはありありと想像される。生涯の間に彼は，きわめて純良なる数百の薬剤を準備し，数々の無味乾燥な，形式どおりの報告を書き，幾十の忠実な翻訳をするであろうが，大したことはしでかさないにちがいない。大したことをするとなると，空想とか，発明力とか，洞察力とかいうものが必要になってくるが，(彼) には，そういったものは薬にしたくもない。早い話が，これは学問の主人ではなくて，下男なのである。」この種の人物は往々にして自分の専門分野の「至上主義」者である。彼もまた医学至上主義者であり，彼にとってはこの世に医学ほど優れた科学はなく，医者ほど立派な人間はいない。このような専門主義的鈍物への批判と関連して，チェーホフは同時に「大学的伝統」のありかたについて付言することをも忘れてはいない。「学者にとって，一般に教養ある人間にとって存在しうるものは，ただ，医科とか法科とかのいっさいの区別をはなれた，全体としての大学的伝統にほかならない。」――作品のなかではほんの余談に過ぎないこんな話にも，研究者であり大学人である我々にとっては決して見過ごすわけにはいかない見識が含まれている。

事例を挙げれば際限がないから，脇道の逍遥はこの辺でやめておこう。何れにせよ，かって思春期の私が恐らくは何気なく読み過ごしたであろうこうした点景が，それなりの意味とリアリテを以て受け止められ得るのは，その後に重ねた年輪と，――そしてこの場合は多分に職業の功であろう。

＊

ここで取り上げるのは，やはり年齢と職業の功によって他の点景から浮上した一事例である。だがそれに触れる前に，一応は作品の輪郭を語っておく必要があろう。独白体の形式によるこの作品の主人公は，医学上の優れた業績と人類への貢献によって，またそれに相応しい地位と名声によって，栄光に包まれた一名誉教授である。傍目から見れば，この老学者が現に歩みつつある人生も，その外的な栄光と同様に絢爛たる光輝に満たされたものと想像されるであろう。しかし彼自身の実感する自己の実存は，それとはまったく裏腹である。「わたしの名まえが輝かしく美しいと同程度に，わたし自身は陰気で醜悪だ。」冷え冷えとした家庭，索漠とした凡庸な日常。しかも医学者である彼は，自らの生命が確実に終焉に近づきつつあることを知っている。小説の内容は，このような老学者による自分の生活と内面とのとめどもない描述であり，要するに標題通り「退屈な話」なのである。唯一の劇的な出来事といえば，同僚の遺児である不可解な娘との交渉によって老残の身に引き起こされる微かな波紋，――束の間の侘しい乱反射を放って消えていくであろう微かな波紋に過ぎない。チェーホフは主人公のいかにも散文的な――といってもこれは飽くまで見せかけの技巧であって，実際には極めて彫りの深い，密度の高い描写なのだが――独白を通して，人生の襞の深部，決して号泣とはなり得ぬその哀切に容赦のない照明を当てる。

ところで，この老学者の無味乾燥な生活

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

に生気を取り戻す唯一のものは，生涯にわたって並々ならぬ情熱を傾けてきた「講義」である。彼は次のように言い切って憚らない。「どんなスポーツでも，どんな娯楽でも遊戯でも，ついぞ一度もわたしに，講義するときほどの喜びを与えはしなかった。ただ講義においてのみわたしは，全身心を情熱にゆだねることができた。そして霊感なるものが詩人の創作ではなくて，現実に存在するものであることを理解した。」ではその「講義」はどのような条件のもとに，どのように進められるのか。そもそも理想的な講義とはどのようなものか。老学者の言うところを幾らか分析的に――折角の文学的表現が砂を嚙むようなものになる恐れはあるが，しかし我々の主題は文学そのものにではなく，まさに講義「論」にあるのだから――辿ってみよう。

【講義の心理】　講義されるべき内容は予め充分心得ているが，講義そのものの展開についての準備はまったくない。ただ「前講でわれわれは……で終わっていますね」という発端の文句さえ言えば，あとは次々と言葉が流れでて，弥がうえにも調子は高揚していく。但しこのような自在の域に達し，巧みに講義を運ぶようになるためには，従ってまた「聴衆にとって退屈でないよう，利益になるよう」にし得るためには，才能のほか，経験と熟練が必要である。

【予め把握しておくべき観念】　講義に際しては，①自分自身の力量，②相手である聴衆の状況，③題目をなすもの，についての最も明確な観念を予め把握しておかなければならない。但しこれらの観念を運用して優れた講義を展開するためには，なおその上，「抜け目ない」人間であること，つまり行き届いた目くばりができ，常に視界を失わない人間であることが必須要件である。

【二つの敵】　よき講義者は，作曲者の思想を伝えるのに当たって同時に多くのこと――同時に楽譜を読み，指揮棒を振るい，オーケストラの各楽器の奏者に適宜に指示を与え，等々――を行うよき指揮者と同様，同時に多くのことに留意し，多くのことを行わなければならない。その際，特に次の二つの敵に注意深く対処する必要がある。第一の敵はいうまでもなく聴衆という「怪蛇」である。講義の目的は何よりもこの怪物を征服することにある。そのためには，怪物の理解力と注意力の状態について常に明確な「推定」をもたなければならない。第二の敵は自分自身のなかに巣くっている敵である。この敵とは，「形式，現象，法則の限りなき変化」及び「それらによって約束された自他の思想の数々」から成る膨大な材料であり，講義者はそのなかから講義の目的と聴衆の状態に応じて最も重要且つ必要なものを適切に選別・抽出・配列する手練を心得ていなければならぬ。

【思想の配列とレトリック】　講義においては，思想は，講義者におけるそれの蓄積の方法と配列とは異なった仕方で，つまり講義の目的に応じて「わたしが描きたいと思う構図の正しい結合のために必要な一定の順序」に従って配列され，再構成しなければならぬ。さらにその配列は，聴衆の理解力に適合し，その注意を喚起し得る形式に「潤色」される必要がある。この「潤色」には，なおその上，レトリックとしての側面，つまりある種の「文学性」が要求される。講義者は「定義が簡潔的確であるよう，文句ができるだけ単純で美しくあるよう，努めなければならぬ。」

【注意の一新】　時間が経過し，聴衆の間

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

に注意力減退の証拠が現れたら，機を伺ってすかさず「だじゃれ」を飛ばすとよい。そうすれば注意が一新されて，そのまま講義を続行し得る状態が回復する。

【講義という仕事の性格】 この仕事には，同時に学者としての，教師としての，また演説家としての側面がなければならず，このうち何れかの側面が他の側面に優越し，他の側面を圧倒するようなことがあってはならぬ。

以上が老学者の口を借りて語られたチェーホフの講義論である。これについて或いは言われるかも知れない，ここでチェーホフが語っているのは一種の「講義の芸術」ともいうべきもので，一般にはとても真似のできるものではない，と。また或いは言われるかも知れない，当今我々が講義において相手にしなければならぬ怪物の大半は，チェーホフが念頭に置いていたような並みの怪物ではなく――何しろ彼等は最近の日本の教育公害による突然変異の結果として出現した桁外れの妖怪なのだ――，上記のような正攻法の理念型を以てしてはとても対応しきれるものではない，と。しかしながら，こうした反論は概ね運用と具体化の問題に係わるもので，よき講義の一般的性格と骨格に関する限り――だからこそそれは理念型なのだ――，これはその極めて的確な要約ではないかと思われる。その一々の柱について教授論的考察を展開するに値すると愚考し，敢えて紹介の労を取った次第である。

*

〔余論――講義とユーモア〕

最後に少々くだけた話題を以てエピローグに代えよう。チェーホフの描く老教授は，聴衆の注意力が減退しだしたら「だじゃれ」を飛ばして場の雰囲気を一新すればよい，と言っている。これは言われるまでもなく多くの教師が意図的であると否とに拘わらず実践していることである。だが同時にこれがなかなかの高等技術に属することも多くの教師の常々痛感するところであろう。

最近の学生にはユーモアが通じにくくなった，という声が屢々聞かれる。もっともこの種の発言は幾分割り引いて受け取ったほうがよいかもしれない。というのは，当人がユーモアと確信していても，客観的には何らユーモアでない場合も少なくないからである。面白くもない冗談を語り，聴衆がシラケきっているのに，語っている当人だけがゲラゲラと勝手に面白がっている光景ほど惨めなものはない。だがそのことは別としても，10年ほど前の学生には好評を博した知的で洗練されたユーモアが，一般に最近の「怪物」たちの征服に功を奏し難くなっていることだけは紛れもない事実である。

例えば，聴衆の注意状態と講義の適切なコンテクストを考慮しつつ，頃合を見て，私の大好きな「ピカソの微笑」という笑話を提示したとする。

> 「ドイツ空軍将校の一団が，パリにあるパブロ・ピカソのアトリエを訪れた。一人の将校が有名な『ゲルニカ』の絵を見て，偉大な画家に尋ねた。
> 『これはあなたのお仕事ですか？』
> ピカソは微笑した。
> 『いいえ，あなたがたのお仕事です。』」（長橋芙美子『言葉の力で――ドイツの反ファシズム作家たち』所収）

この笑話は，長橋氏も言われるように，

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

まさに感動的な風刺なのだが，――わが親愛なる「怪物」たちの間には，案の定何の反応も引き起こさない。そこでいささか押しつけがましいが，「怪物」のひとりに，「君，この話は面白くないかね」と尋ねてみる。怪物君曰く，「別に…」。そこで私「ではこの話の意味は判ったかね。」怪物君曰く，「はぁ，いえ…」――大抵こんな結果になる。意味も判らずに「別に…」もないものだ。この笑話がユーモアとして了解されるには，スペイン内戦，ゲルニカ爆撃，フランコとナチスとの関係，ピカソという人物，その芸術的・政治的経歴，作品「ゲルニカ」，それが描かれた事情，等々についての一定の知識が必要である。要するに知的ユーモアの成立にはある程度の教養が要求されるのだ。

ところで，かくも頑固なる「怪物」に笑いを引き起こす簡単な手段がある。テレビのコマーシャルの真似をすることである。勿論私ごときがやっと仕入れたコマーシャルなど敵は先刻御承知だから，その内容が面白いはずはない。いかにも世情に疎そうな私が，流行遅れのコマーシャルの真似を得々と演ずるトンチンカンなザマが可笑しいのだろう。あるいはより聡明で意地悪な妖怪は，無理をしてこんなサーヴィスをする私の内面の悲哀を見透かして愉快がっているのかも知れない（ヒガミ過ぎ，と言われるだろうが，しかし「笑いとは他人の不幸を見て喜ぶことである」とは，かの傲岸ニヒルな哲学者の至言ではないか）。何れにせよ，昨今では，コマーシャルの真似さえすれば，勤勉実直派，聡明意地悪派，三無派・十三無派，カウチ・ポテト派，雑談会食恐怖派の別なく，一斉に画一に笑顔や爆笑を誘い出せるのだから世話はない。だがチェーホフ描く老学者の折角の忠告も，これほど安易にして低俗な手段で実現されるのでは，特に「大学的伝統」を尊重する立場からすれば，情けない極みである。

折りしも，先般開催された一般教育学会のシンポジウムにおいて，上智大学のデーケン教授は，教養教育の一環として「ユーモア教育」の重要性を訴えられた。チェーホフの老学者ほどではないにせよ，よき講義の実現にはいささかの情熱を燃やしている私としても，この提案には全面的に賛成である。しかしこちらのほうはいかなる手段を講じて養えばよいかと問われれば，今の私にはまったく解答の準備はないから，ここではただ問題の所在の指摘を以て談を終えるほかはない。（チェーホフ『退屈な話』からの引用文は中村白葉訳による）